

## 〔研究報告〕

### G 県の特別養護老人ホームに働く看護職の“やりがい” (第1報)

原 敦子<sup>1)</sup> 小野 幸子<sup>1)</sup> 早崎 幸子<sup>1)</sup> 坂田 直美<sup>1)</sup>  
奥村 美奈子<sup>1)</sup> 兼松 恵子<sup>1)</sup> 梅津 美香<sup>1)</sup> 田中 克子<sup>1)</sup>  
古川 直美<sup>1)</sup> 北村 直子<sup>1)</sup> 齋藤 和子<sup>1)</sup> 平山 朝子<sup>2)</sup>

### “Worthwileness” of the Nurses Who are Working at the Nursing-Home in G Prefecture : Part 1

Atsuko Hara<sup>1)</sup>, Sachiko Ono<sup>1)</sup>, Sachiko Hayazaki<sup>1)</sup>, Naomi Sakata<sup>1)</sup>,  
Minako Okumura<sup>1)</sup>, Keiko Kanematsu<sup>1)</sup>, Mika Umezu<sup>1)</sup>, Katsuko Tanaka<sup>1)</sup>,  
Naomi Furukawa<sup>1)</sup>, Naoko Kitamura<sup>1)</sup>, Kazuko Saito<sup>1)</sup>, and Asako Hirayama<sup>2)</sup>

#### はじめに

本学では、平成13年度より看護実践研究指導事業<sup>注1)</sup>の一環として、3年計画でG県下の特別養護老人ホーム（以下、特養と省略）に個別訪問面接研修<sup>注2)</sup>およびそれに基づくワークショップを行っている。

特養利用者の様相は介護保険導入後より大きく変化し、経済力に関係なく痴呆があり介護度の重い高齢者の利用が多く<sup>1)</sup>、医療依存度の高まりにも対応する必要がある<sup>2)</sup>。また、「措置制度」の時代にはなかった利用者やその家族からサービスの質への要求<sup>3)</sup>や事故に対する追及<sup>4)</sup>も出てきている。平成12年度にG県下の特別養護老人ホームの看護職に対して行った調査<sup>5)</sup>では、人員配置基準ぎりぎりの看護職者数の中で、日常生活援助、診療補助、間接看護援助に関わる多様な業務を行い、福祉施設で医療提供に限界がある中、懸命に活動している様子が明らかになった。

しかし、学外演習等で施設を訪問した際の看護職の活き活きとした表情も強く印象に残っている。このように厳しい特養の状況下でも、活き活きと看護活動が続ける原動力、すなわち「やりがい」は何であろうか。特養における「やりがい」について報告している文献を見出すことはできなかった。

そこで本研究は、G県下5地区のうち平成13年度に実施した2地区（H地区、S地区）の全特養施設での個別訪問面接研修の情報から、特養における看護職としての活動を通じての「やりがい」の内容を明らかにすることを目的とする。これは、特養の看護職の看護活動に対する思い・考えの一端を理解するための基礎資料となり、現状の課題を検討する上で意義があると考えられる。

#### I. 方法

##### 1. 個別訪問面接研修の対象

G県下5地区のうち、H地区の全特養7施設およびS地区の全特養10施設の看護職。

##### 2. 個別訪問面接研修の方法及び倫理的配慮

本学成熟期看護学講座教員が各施設に各々1～2名ずつ担当して訪問し、個別もしくは複数の看護職者を対象に半構造化面接を行った。面接時間は1施設につき、およそ1時間程度であった。訪問日面接ができなかった看護職者に対しては、面接を受けた看護職者を介して調査用紙を依頼し、別途返送によって意見を聞いた。

訪問面接に際し、まず施設長に事前に看護実践研究指導事業の趣旨及び本調査の趣旨を電話で説明し同意を得た。また、面接に応じた看護職者には口頭で看護実践研

1) 岐阜県立看護大学 成熟期看護学講座 Nursing of Adults, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 学長 President, Gifu College of Nursing

究指導事業の趣旨および本調査の趣旨を説明し同意を得た。調査用紙で依頼した看護職には、面接に応じた看護職者を介して看護実践研究指導事業の趣旨および本調査の趣旨を説明してもらい、協力できる範囲で記入してもらえるように依頼した。なお、得られた回答の扱いについては個人名や施設名が特定されないように配慮した。

### 3. 面接内容

面接内容は①対象者（看護職）の属性②所属施設について③入所者について④看護活動<sup>6)</sup>についてであり、④の中で「特別養護老人ホームにおける看護職としての活動を通じてのやりがい」について自由に答えてもらった。

### 4. 個別訪問面接研修実施期間

平成13年8月27日～9月15日。

### 5. 分析方法

分析の対象は面接内容「特別養護老人ホームにおける看護職としての活動を通じてのやりがい」の回答があった対象者とし、その①～③については単純集計を行った。また、その回答内容から、「やりがい」として、喜び・満足につながること・とき、自分にとってプラスになること・とき、特養で看護して良かったと思えること・とき、について述べられている部分を意味内容毎に1記述とし、できる限り表現されている言葉を使用して要約し、類似性に基づいて分類整理した。全分析過程は複数の成熟期看護学講座教員で合意が得られるまで検討を繰り返した。なお、対象者の属性について完全な回答でなくても「やりがい」に回答があった場合は、分析対象とした。

## II. 結果

個別訪問面接研修ではH地区10名、S地区15名の看護職と面接を行った。その後、別途返送で協力が得られたのはH地区11名、S地区16名であった。そのうち「特別養護老人ホームにおける看護職としての活動を通じてのやりがい」について、面接で回答があったのはH地区10名、S地区14名、計24名、別途返送で回答があったのはH地区8名、S地区6名、計14名であった。

### 1. 対象（看護職）者の属性

対象（看護職）者の属性について表1に示す。

年齢は、H地区では28歳～52歳、平均年齢42.7±7.7歳、S地区では25歳～62歳、平均年齢41.6±12.8歳であった。現職場での経験年数は、H地区では3ヶ月～23年、

平均経験年数8.9±8.0年、S地区では3ヶ月～23年、平均経験年数5.7±6.0年であった。過去の経験年数は、H地区では1年～17年、平均経験年数6.5±4.6年、S地区では3年～30年、平均経験年数14.4±9.1年であり、その職場について回答があったH地区11名のうち10名、S地区17名のうち16名が病院・総合病院を含んでいた。性別、所有資格、職位については表1に示す通りであった。

表1 対象者の属性

		H地区 (N=18)	S地区 (n=21)
年齢	20歳代	1	4
	30歳代	4	3
	40歳代	3	2
	50歳代	4	8
	60歳代	0	1
	無回答	6	3
性別	女性	14	18
	男性	0	2
	無回答	4	2
所有資格	看護師	11	8
	准看護師	3	13
	ケアマネージャー	3	3
	介護福祉士	1	1
	無回答	4	0
職位	副施設長	0	1
	施設部長	0	1
	課長	0	1
	看護長・チーフ	2	0
	介護主任・主査	4	5
	スタッフ	5	11
	その他	0	1
	無回答	7	1
現職場での 経験年数	1年未満	1	3
	1年～5年未満	4	8
	5年～10年未満	3	3
	10年～15年未満	1	2
	15年以上	3	2
	無回答	6	3
現職場以前 の経験年数	1年未満	0	0
	1年～5年未満	5	2
	5年～10年未満	4	4
	10年～15年未満	2	3
	15年～20年未満	1	3
	20年以上	0	5
	無回答	6	4
現職場以前 の職場 (複数回答)	病院・総合病院	11	16
	診療所・開業医・個人病院	3	3
	老人保健施設	2	1
	特養	0	1
	デイサービス	0	1
	訪問看護ステーション	1	1
	福祉センター	1	0
	無回答	6	5

### 2. 所属施設について

両地区の設置主体、定床数、開設年代、併設施設の有無とその種類は表2に示す通りであった。

### 3. 入所者について

両地区の入所者の年齢構成、性別、介護度、痴呆度、

表2 所属施設について

		H 地区 (N = 7)	S 地区 (n = 10)
設置主体	社会福祉法人	4	6
	広域連合	2	1
	福祉施設事務組合	0	2
	市立	0	1
	8ヶ町村	1	0
定床数	50床	3	4
	51～100床	2	2
	100床	0	3
	120床	1	0
	130床	1	0
	160床	0	1
開設年代	1970年代	1	1
	1980年代	3	3
	1990年代	2	6
	2000年代	1	0
併設施設	なし	0	2
	ある	7	8
	併設施設の内訳ショートステイ (複数回答) デイサービス	6	8
	在宅介護支援センター	4	7
	ホームヘルプサービス	4	5
	その他	1	1
	その他	1	5

平均在所月数は表3に示す通りであった。

#### 4. 「やりがい」について

##### 1) 「やりがい」の有無について

特養の看護職としての活動を通じての「やりがい」を回答した人は、H地区16名、S地区18名、計34名(87.2%)であり、「やりがいはない」と回答した人は、H地区1名、S地区2名、計3名(7.7%)であった。また、「やりがい」として捉えられない(意味不明)回答であったものはH地区1名、S地区1名、計2名(5.1%)であった。

##### 2) 「やりがい」として述べられた内容について

「やりがい」として述べられた内容は、H地区31項目、S地区34項目の計65項目であった。この65項目を分類・整理した結果、①【入所者・家族の状態がケアによって好転したとき】、②【最期までその人らしさを大切に生活したとき】、③【入所者との触れ合いを大切にできること】、④【入所者の笑顔・元気な姿を見ること】、⑤【特養の看護職としての役割がとれていること】、⑥【自分のこととして高齢者の看護ができること】、⑦【入所者への理解が深まったとき】、⑧【特養でのケア体験が活かせること】の8つに分類された。(表4)

##### (1)【入所者・家族の状態がケアによって好転したとき】

この「やりがい」は、H地区7名、S地区9名、計16

表3 入所者について

		H 地区 (N = 7)	S 地区 (n = 10)		
年齢	65歳未満	10%未満	6	8	
		10%未満	1	2	
	65歳以上～75歳未満	10%以上～20%未満	5	4	
		20%以上	0	2	
	75歳以上～85歳未満	20%以上～30%未満	0	1	
		30%以上～40%未満	3	4	
		40%以上	3	3	
	85歳以上～95歳未満	30%以上～40%未満	4	3	
		40%以上～50%未満	2	4	
		50%以上	0	1	
95歳以上～100歳未満	10%未満	6	8		
100歳以上	10%未満	6	8		
未記入		1	2		
性別	女性	70%未満	1	0	
		70%以上	5	8	
	男性	20%未満	1	4	
		20%以上～40%未満	4	4	
		40%以上	1	0	
	未記入		1	2	
介護度	要介護1	10%未満	1	2	
		10%以上～20%未満	5	4	
		20%以上	0	1	
	要介護2～3	20%以上～30%未満	0	3	
		30%以上～40%未満	2	2	
		40%以上	4	2	
	要介護4～5	30%以上～40%未満	0	2	
		40%以上～50%未満	3	1	
		50%以上	3	4	
	未記入		1	3	
痴呆度	痴呆あり	0%以上～20%未満	2	4	
		20%以上～40%未満	2	1	
		40%以上～60%未満	1	1	
		60%以上	1	0	
		未記入	1	4	
	軽度～中度痴呆	0%以上～20%未満	1	0	
		20%以上～40%未満	0	0	
		40%以上～60%未満	4	4	
		60%以上～80%未満	0	0	
		80%以上	1	0	
		未記入	1	6	
		重度痴呆	0%以上～20%未満	3	1
			20%以上～40%未満	2	2
	40%以上～60%未満		0	1	
	60%以上		1	0	
	未記入		1	6	
	平均在所月数	3ヶ月以上～1年未満	1	1	
		1年以上～3年未満	2	2	
3年以上～5年未満		2	2		
未記入		2	5		

名が述べた25記述から得られた。これには「対話やケアによって笑顔や安心が得られるとき・こと」,[表情・反応の乏しい入所者が表情の変化・反応したとき],[ケアによって状態が改善したとき]等, 11分類が含まれた。また, この「やりがい」を病院との比較で述べているの回答者が1名いた。

##### (2)【最期までその人らしさを大切に生活した生活援助中心のケアができること】

この「やりがい」は、H地区9名、S地区4名、計13

表4 「やりがい」の内容

大分類	小分類	回答内容の要約	地区	
【入所者・家族の 状態がケアによっ て好転したとき】	[対話やケアによって笑顔や安心が得られるとき・こと]	声えかけで安心されること	H	
		(関わって) 入所者が笑顔を返してきた時	S	
		信頼関係を大切にスキンシップし、会話を通して入所者の笑顔が見られる時	S	
		悩みながらのケアでも入所者より笑顔が見られる時	S	
		入所者との対話で笑顔をみること	S	
	[自分の存在が認められ、頼られるとき・こと]	頼ってくれる	H	
		入所者が出勤してくれるのを待っていてくれること	H	
		頼られること	H	
		自分の存在が認められること (時)	H	
		入所者からちょっとした言葉をかけられた時	S	
	[ケアによって状態が改善したとき]	入所者が信頼して相談してくれるなど頼りにしてくれる時	S	
		[意思の疎通ができたとき]	意志の疎通ができた時	S
		[表情・反応の乏しい入所者が表情の変化・反応したとき]	反応が乏しい入所者が反応したとき	H
		[ケアによって状態が改善したとき]	表情の乏しい人の表情が変わった等、些細な変化があったとき	H
		[状態が回復し、喜んでもらえたとき]	悪い状態が回復し、喜んでくださった時	H
		[ケアによって食事摂取や摂食動作が可能になったとき]	経管栄養から経口への切り替えができたとき	S
			病院より食事摂取困難で入所者した人が食事が可能になったり、本来の状態に戻ったとき	S
			自力での摂食が不可能だった入所者がリハビリで可能になったとき	S
		[褥創が改善・治癒したとき]	褥創が治癒したとき	H
			褥創がケアで良い方向に向かったとき	H
[排便のコントロールができたとき]	入所者の排便のコントロールができたとき	S		
[家族に働きかけ、対面できたとき]	面会に来ない家族に働きかけ、対面できたとき	S		
[家族から感謝されたとき]	家族より最期を施設で過ごせて良かったと言われたとき	H		
	家族からの感謝の言葉が得られたとき	S		
【最期までその人らしさを大切に した生活援助中心の ケアができること】	[利用者に即した個別的看護ができること・できたとき]	病院とは異なり、利用者と直接関わる時間が多く、個性に応じた看護ができること	H	
		その人のベストに沿う (その人にあった看護) を行うことができたとき	H	
		病院とは異なり入所者の反応をじっくり見て対応できること	S	
	[観察・判断力が求められ、ケアの工夫ができること]	積極的な治療ではなく、看護ケアで対処できること	H	
		病院とは異なり、常勤医のいない中で観察し判断し、創意工夫したケアや介護が求められること	S	
		医師不在時に正しく判断できた時	S	
		[最期まで入所者の思考・感情に基づく生活援助ができること]	病院とは異なり、最期までその人の思いを汲んでケアできること	H
			病院とは異なり、入所日から人生の終焉までの生活に関われること	S
		[特養独自の老人の生活の援助ができること]	施設でなくてはできない老人の生活の援助 (介護) ができること	S
[人間らしく生きるための援助ができること]	人間らしく生きるための援助ができること	H		
[自然な死を看取ることができること]	自然な死を看取ることができること	H		
[看護の原点は特養にあると思えること]	看護の原点は特養にあると思えること	H		
[変化のある施設内の看護]	変化のある施設内の看護	H		
【入所者との触れ 合いを大切にでき ること】	[入所者と余裕を持ってコミュニケーションがとれること]	病院よりコミュニケーションがとれる	H	
		処置やケアに追われることなく、入所者とゆっくりと話ができること	S	
		病院より時間の余裕があり入所者とコミュニケーションがとれること	S	
		余裕を持ってコミュニケーションをとることができ、入所者が笑顔で家族の話をしてくれるとき	S	
	[緊張がなく自然にかかわることができること]	身内のような関係	H	
		自然体で関われる	H	
		家族の一員という感じになれること	S	
		緊張なくかかわることができ、入所者から常識や昔のことなどを教えられる時	S	
[老人と触れ合えること]	病院とは違い緊張がなく自分の心を聞きつつ老人と話ができること	S		
	老人と接すること	H		
	家族に会う時と同じで、入所者に会えること自体	S		
	入所者との触れ合い	S		
[老人との触れ合いを大切にできること]	老人との触れ合いを大切にできること	H		
【入所者の笑顔・ 元気な姿を見るこ と】	[入所者の笑顔・元気な姿を見ること]	老人の明るい声や笑顔を見ること	H	
		施設での生活に慣れて笑顔が見られるとき	H	
		入所者の元気な姿を見ること	S	
		入所者の笑顔を見ること	S	
		老人の笑顔を見たとき	S	
【特養の看護職と しての役割がとれ ていること】	[特養の看護職として指導的役割がとれること]	看護職としての知識を他職種に伝えることができた時	H	
		少ない看護職でワーカーを指導する立場にあり、幅広い知識が求められること	S	
	[ケアワーカーとの関係を良好に保ていること]	ケアワーカーとの関係が良好であること。	H	
【自分のこととし て高齢者の看護が できること】	[自分のこととして高齢者への看護ができること]	将来自分もたどる道として、自分も入りたいと思える場所として整えること。これが仕事を継続したい理由となっている。	S	
		自分の老いを自覚し、充実した日々を過ごすことの大切さから、特養看護職としての仕事に従事していること	S	
【入所者への理解 が深まったとき】	[生き様、感情、生活の仕方が理解できること・とき]	その人なりの生活の仕方があることがわかったこと	H	
		生活史を聞くことを通して、生き様を知ることができること	H	
		一見してはわからない入所者の様々な感情の理解ができたとき	H	
【特養でのケア体験 が活かせること】	[特養でのケア体験が地域で活かせること]	痴呆入所者の対応体験を活かして地域や在宅の人の生活を見ることができると	S	

名が述べた13記述から得られた。これには「利用者に即した個別的看護ができること・できたとき」, 「観察・判断力が求められる, ケアの工夫ができること」, 「自然な死を看取ることができること」, 「看護の原点は特養にあると思えること」等, 8分類が含まれた。また, この「やりがい」を病院との比較で述べている者が5名いた。

(3) 【入所者との触れ合いを大切にできること】

この「やりがい」は, H地区4名, S地区6名, 計10名が述べた13記述から得られた。これには「入所者と余裕を持ってコミュニケーションがとれること」, 「老人との触れ合いを大切にできること」等, 4分類が含まれた。また, この「やりがい」を病院との比較で述べている回答者が3名いた。

(4) 【入所者の笑顔・元気な姿を見ること】

この「やりがい」は, H地区2名, S地区3名, 計5名が述べた5記述から得られた。これには「入所者の笑顔・元気な姿を見ること」の1分類であった。

(5) 【特養の看護職としての役割がとれていること】

この「やりがい」は, H地区1名, S地区1名, 計2名が述べた3記述から得られた。これには「特養の看護職として指導的役割がとれていること」, 「ケアワーカーとの関係を良好に保てていること」の2分類が含まれた。

(6) 【自分のこととして高齢者の看護ができること】

この「やりがい」は, S地区2名が述べた2記述から導かれた。

(7) 【入所者への理解が深まったとき】

この「やりがい」は, H地区1名が述べた3記述から得られた「生き様, 感情, 生活の仕方が理解できること」から導かれた。

(8) 【特養でのケア体験が活かせること】

この「やりがい」は, S地区1名が述べた1記述から得られた「特養でのケア体験が地域の中で活かせること」から導かれた。

### Ⅲ. 考察

#### 1. 対象者の特徴について

H地区の対象者の特徴は, 病院勤務の経験があるスタッフ看護師で, 年齢は30~50歳代, 現職場での経験年数は1~5年未満, 現職場以前の経験年数は1~10年未満が多い傾向がみられた。また, S地区の対象者の特徴

は, 病院勤務の経験があるスタッフ准看護師で, 現職場での経験年数は1~5年未満, 現職場以前の経験年数は20年以上が多い傾向がみられたものの, 病院勤務の経験があるスタッフ准看護師ということ以外は, 全体にばらつきがみられた。所属施設については, いずれも設置主体が社会福祉法人であり, 併設施設を持っている50床の施設が多い傾向があった。入所者については, いずれも1年以上入所している痴呆をもつ後期高齢者の女性が多い傾向がみられたものの, 介護度, 痴呆度については施設によって様々であると捉えられた。全国調査<sup>7)</sup>で, 50~59床の施設が52.9%と半数以上を占め, 痴呆のある入所者の構成割合が89.8%であることと比べてもG県のH地区, S地区は, 施設規模, 入所者の特性は全国的にみて平均的な特養が多いといえよう。

#### 2. 特養に働く看護職の「やりがい」について

特養の看護職の「やりがい」は8つに分類された。広辞苑によると「やりがい」は「するだけの値うち」であり, 「やりがい」は, その人にとって価値があることを意味し, 今回の場合は看護観や高齢者観等が反映されているといえる。この視点から, 上位5つの「やりがい」について以下に考察する。

【入所者・家族の状態がケアによって好転したとき】は16名25記述から得られ, 最も多く述べられた「やりがい」であった。高齢者の多くは, 程度の差こそあれ何らかの機能的・器質的障害を有し, 脆弱さゆえにちょっとしたことで全身状態が悪化しやすく死に至ることも少なくないため, 経過の予測が難しいといわれる。このような高齢者に対し, 医療ではない日々の看護ケアによって状態が好転することは看護職の独自性が発揮されることであり, そこに特養で働く看護職の存在価値を感じ取れることによると考える。

【最期までその人らしさを大切に生活援助中心のケアができること】は, 特養が終の住処といわれるように, 高齢者個々がその人らしく最期まで生活できるよう, 看護職は他職種と協力して支援するという, 特養に特徴的な看護職の役割を述べているものであった。この役割を果たし, そこに存在価値を感じているのは, 特養でのケアのあり方の基本と看護職の看護観が一致しているからであり, それ故に, 特養での看護活動の魅力と捉えられた結果といえよう。

【入所者との触れ合いを大切にできること】は、情報収集手段やケアそのものになる、言語的あるいは非言語的コミュニケーションが充分にとれることを述べているものであった。高齢者は家族と離れ、それまでの住み慣れた環境や人間関係が変わってしまい、何らかの不安や孤独を感じている人達である。触れ合うということは、高齢者に安心をもたらす重要なケアである。特養に働く看護職は単に高齢者が好きというだけではなく、自分が高齢者と触れ合うことで高齢者に安心をもたらしていると感じ、自分にとっても高齢者にとってもプラスになっていることに価値を感じている結果挙げられたと考える。

【入所者の笑顔・元気な姿を見ること】は、高齢者の心身の状態が良好であることを高齢者の表情やふるまいから認識し、「やりがい」を感じているものであった。高齢者へのケアの効果は具体的には現れにくい。したがって全体的に良好であればケア全体がうまくいっていると捉え、その肯定的評価が「やりがい」として捉えられたと考える。

【特養の看護職としての役割がとれていること】には、【特養の看護職として指導的役割がとれていること】【ケアワーカーとの関係を良好に保てていること】が含まれた。このことは、筆者らが報告した「G県下2地区の特別養護老人ホームに働く看護職の看護活動に関する意識」<sup>8)</sup>のなかで、『より充実（強化）したい看護行為』として「施設内の他の保健医療従事者との連携」があげられていたことより、上記2つの小分類は特養の看護職としての活動を行う上で重要なテーマであり、このことの充実感が「やりがい」につながっていると考える。

また、病院と比較して述べた「やりがい」がいくつかみられた。【最期までその人らしさを大切にした生活援助中心のケアができること】は13名中5名、【入所者とのふれあいを大切にできること】は10名中3名、【入所者・家族の状態がケアによって好転したとき】は16名中1名が、病院との比較で述べていた。これらは、回答者らが行いたかったが病院では充分に行えなかつた、特養における看護職の活動を通じて可能になったことであり、従って、これらは特養だからこそできる看護活動の魅力のひとつであると捉えられよう。

但し、【最期までその人らしさを大切にした生活援助

中心のケアができること】【入所者との触れ合いを大切にできること】【入所者への理解が深まったとき】は、高齢者のペースで関わりがもてることが前提となっている「やりがい」である。介護保険導入後の利用者の変化に伴い、医療依存度の高い高齢者の受け入れも検討している特養が増えている<sup>9)</sup>ことから、今後看護職にかかる業務、またそれに伴う責任はより大きく重いものになるだろう。現在特養に働く看護職の「やりがい」が保たれ、特養での看護活動をよりよいものとし、今後も続けていけるよう、人員配置基準の見直しや医師の常勤化など、利用者の変化に対応した環境の整備が急務であると考えられる。

## まとめ

本研究では、特養の看護職の実態の一部を検討し基礎資料とすることを目的とし、G県下2地区の特養で働く看護職の「やりがい」の内容の検討を行った。

H地区18名、S地区21名、計39名の看護職を対象に分析を行った結果、以下のことが明らかになった。

1. 看護職の特徴は、いずれの地区も、病院勤務の経験があり現場での経験年数は1～5年未満の者が多い傾向を示した。H地区ではスタッフの看護師が多いのに対し、S地区ではスタッフの准看護師が多い傾向を示した。
2. 所属施設および入所者の特徴は、いずれの地区も、社会福祉法人で何らかの併設施設を持つ50床の施設が多い傾向を示した。また、入所者はいずれも1年以上入所している痴呆を持つ後期高齢者の女性が多い傾向がみられた以外は、施設によって様々であった。
3. 特養の看護職の「やりがい」は①【入所者・家族の状態がケアによって好転したとき】、②【最期までその人らしさを大切にした生活援助中心のケアができること】、③【入所者との触れ合いを大切にできること】、④【入所者の笑顔・元気な姿を見ること】、⑤【特養の看護職としての役割がとれていること】、⑥【自分のこととして高齢者の看護ができること】、⑦【入所者への理解が深まったとき】、⑧【特養でのケア体験が活かせること】の8つに分類された。なお、このうち病院との比較から述べられたものは①、②、③であった。

## おわりに

ご多忙の中、個別訪問面接研修に応じてくださいましたH地区、S地区の特養看護職の皆様には貴重な情報をいただきました。心より御礼申し上げます。

なお、本研究は、岐阜県立看護大学における看護実践研究指導事業の一環として県の助成金を受けて行ったものであり、深謝いたします。

注1) 看護実践研究指導事業：岐阜県より助成を受け、自己研鑽の機会に乏しい岐阜県内の看護職が本学の知的資源を利用して自己学習や業務改善ができるようになることを目的に、現状を把握し現場の実態に即応した適切な方法を用いて、看護の実践研究指導・研修を行うものであり、平成13年度は、「過疎地域診療所」と「特別養護老人ホーム」の看護職を対象に実施をしている。特別養護老人ホームの看護実践研究指導事業は、個別訪問面接研修とそれを基にしたワークショップから構成されている。

注2) 個別訪問面接研修：個別の面接を通じてデータを得るとともに、面接すること自体が対象者への刺激となり研修につながることを意図したものである。

## 文献

- 1) 三浦文夫編：図説高齢者白書2002年度版；132, 全国社会福祉協議会, 2002.
- 2) 日本看護協会調査・情報管理部調査研究課編：2001年医療施設・介護保険施設の看護実態調査(日本看護協会調査研究報告 No. 65)；21, 日本看護協会出版会, 2002.
- 3) 前掲1)；159.
- 4) 前掲1)；16.
- 5) 小野幸子, 田中克子, 北村直子他：岐阜県の特別養護老人ホームにおける看護職の活動の現状と課題, 岐阜県立看護大学平成12年度共同研究報告書；50-57, 2001.
- 6) 小野幸子, 坂田直美, 早崎幸子, 原敦子他：G県下2地区の特別養護老人ホームに働く看護職の看護活動に関する意識, 岐阜県立看護大学紀要, 2(1)；83-89, 2002.
- 7) 生活情報センター：介護サービス統計資料年報2002；72-76, 株式会社生活情報センター, 2002.
- 8) 前掲6)
- 9) 前掲2)

(受稿日 平成15年2月25日)